

三島総長と二十年

村山 有

昭和四十年四月二十日……生涯忘れられない日であった。此の日の朝久留島秀三郎先生（ボーイスカウト日本連盟理事長、東京連盟連盟長）と三島通陽総長が危篤状態を脱した事は全く奇跡であるとお互いに悦んだ。然し運命は残酷であった。最早此の時、三島総長は脳溢血を併発して最早絶望に陥っていた。

神宮通りの伊藤病院に馳せつけた。そしてその夜八時五十分に昇天される迄の時間は長い長い時間であった。

高山芳雄先生が呼吸、脈膊の様子を控室における我々に刻々報告して下さった。久留島、古田誠一郎、池留三、小林運美、岩波信平諸氏が最後の御臨終を待った。

三島総長の千駄ヶ谷の邸宅には一九三六年以来再三お伺いしてアメリカ二世のボーイスカウトを連れて行き歓談をした事があった。

戦後日本少年団総長竹下勇大将の命により占領軍当局にボーイスカウト運動再建申請をして以来二十年……三島総長と歩んだ意義ある日々であった。一口に云って二十年であるが、占領下で総司令部当局との折衝から、スカウトクラブの事や、日本連盟組織等の幾多の苦難が走馬灯の様に脳裏を走り去った。

総長の発病前にどうした事か、私と話された幾多の事が遺言の形で私の中に残ったかと思うと総長の長逝は何と云っても十年否、それ以上早かった事を痛感せずにはおらない。

『ボーイスカウト運動の再建に対してあなたに深く感謝している日本は今後諸外国ともっと親しくして行かなくてはならない。しっかりとやって下さい……』何して総長がことさら私に云われたのか別に気にもとめなかった。

総長の御臨終を聞きつつ、遺言と云うか最後の言葉となったのかと、過ぎ去った日々を思出すのである。三島総長の事は多くの人が書く事と思うが、二十年間に特に感激した事等を記してみたい。

発病されてからも奥様に幾回となく私の事をくりかえして語っておられたと云うが、目頭が熱くなる。人情もろく、何事も心得ておられた総長は、時としては慎重すぎる程の事があつた。然し総てが懐しい思出となつてしまつた。

初期の歩み……………

日本の敗戦の日……八月十五日夜日本少年団総長竹下勇大將は泉岳寺近くのお宅から目黒の里の私の家に疎開して来ておられた。私は米国で日米親善の為に日本の在郷軍人を米国に招待して、米国の郷軍と大いに交歓しようと提案し、一九三五年に竹下海軍大將を団長とする一向を桑港で迎えた。竹下大將は少年団総長でもあり、第一回米国ジャンボリーに行く日本少年団派遣団は内田二郎氏を団長として同行していた。竹下大將は日露戦争当時海軍武官としてワシントンにおり、ルーズベルト大統領に柔道を教えつつ日露戦争の調停に持ちこみボーツマス講和会議を実現した人であり、新渡部博士の「武士道」を彼に与えて、日本人を理解させる事に努力した人であつた。桑港にはポートル祭りの折に軍艦出雲の艦長として訪問し大いに人氣のあつた提督である。

日本に来てから非常に御親切な指導を頂いた。大東亜の激動は日本少年団の解散の運命にまで追いこんだが、竹下邸に於て橋田文相が、少年団の解散を要請した時であつた。

『文部省の役人に青少年の訓育が出来るか。少年団は世界連盟につながる国際団体であるから役人共の指示はうけない』と断乎とはねられた。

然し時世は急変し一九四〇年に少年団は解散したが、海洋少年団は存続した。

一九四五年六月十五日……大日本海洋少年団解散式は私の家で竹下大將が長沢直太郎、小山武、原道太諸氏を始め多くの人々を集めて行われた。

その解散式が行われた同じ場所で二ヶ月後に、竹下大将は私に米軍にボーイスカウトと云えば必ず理解するし、日本再建はボーイスカウトによる外ないとの事で、私は重大な命をうけたのであった。其後戦犯嫌疑で捕えられたが、幸にして私の世話をしていた捕虜が立派な海軍少佐のヘンシヨウ君であった。嫌疑は解消してマクアーサー元帥の最高副軍部に直結する運命となった。

ボーイスカウト再建を申請し、内田二郎氏も馳せつける三島総長との再開と云う事になったのであるが、戦後歩んだ途は宿命的なものが多々ある。

三島総長の熱情と誠意に動かされて戦後二十年の月日を歩んで来た。

士は己を知る者の為に死す：と云う言葉が真実なれば、私は占領下に於て三島総長を追放からはずし、海外にまで旅行をして日本のボーイスカウト運動に全精力を注ぎ歩んで来た。三島総長が先生に『あなたは此の道に殉じられた。私は最後の努力をしたいから協力してほしい』と云われたが総ては過去の思出となつてしまった。

戦後宮内省を辞した関忠志君と二人で、三島総長の友人である山本有三氏の事務所の一隅に机を一つおき『さあどうするか……』と思案をした時は、まだ昨日の様であった。

関君は『日本連盟を組織するに際し、印刷物を注文したが、受取る費用がない』と悲痛な顔をしていた。私は月給を先借りして之を受取った。

当時占領軍の意向を打診しつつ規約等を作成したが後になって、内容を批判する人があったが、考えて見ると、その当時の一行一句に占領軍当局との論争あり、こぜりあいがあった。後から来て再建者の苦勞も知らず批判する事は極めて楽である。当初に於ける三島総長の忍従的苦心と関君の努力を私は高く評価する。

千代田生命会館が接収を免除されるならば一部屋事務所に貸せるとの事で大芝居を打った。勿論後になってGHQの最高部と談笑中に解決してしまったが、今考えても大きな芸当であった。

『大丈夫ですか、注意して下さいよ』と三島総長は心配した事があった。

扱、ボーイスカウト再建途上に於てマクアーサー元帥から直接にフリーメーションに関する相談があったと三島総長は話された。『私は戦前にメーションの嫌疑で取調べられた事があったが、実際は何も知らないから資料を集めて研究してほしい』との事

であった。

ボーイスカウト支持を約束して努力した人々が殆どメーソンであった事も奇縁と云えようか。米軍関係者と打合せをする場所もなく如何にするか困ってしまった。

戦前から少年団に關係していた白橋竜夫氏の処が戦災にあわず残っていたから三島総長と白橋氏に無理をお願いする事とした。會議に続いて必ず日本食を出す様になった——否、一日も早くGHQの許可を獲得してボーイスカウト運動を發足させる為に全力を尽したと云ってよい。

その最大の犠牲者は白橋竜夫氏夫妻であった。三島総長は『白橋さん方の御尽力がなかったら何も出来ませんでした』と述懐していた程であった。

白橋夫妻は外人の好む天ぷらを準備する為に伊勢海老を買っておき徹夜をして準備したり、それは筆舌に尽せないものがあった。三島総長は私に『白橋氏の様な立派な人は少いです。連盟が發足して需品部をおいたり、連盟に九十万円を融資してくれたり感謝しても限りあるものです。然し、自分の犠牲を一口も云わないが、私は何とかして感謝の意を述べる様にしたいです』と語っていた。

総長自ら正式に感謝を述べる機会もなく長逝されたが、他のスカウト關係の計画と共に永遠に實現されぬ儘となってしまった。

白橋宅に集った外人は左の諸氏であった。

ダーギン、タイパー、フィシャー、ウイリアムス、スチュワード中佐、リヴィスト少佐、ネピア少佐、サリバン女史

彼等はダーギン氏を除いて日本には初めての人々であったが、會議を重ねるに従い次第に好意的になって来た。ソ連が何事にも反対するから彼等にも充分了解出来る様な方針で行かなくては失敗に終わると云うので、極めて綿密な研究を重ねた。

当時の規約等に対して心ない批判をする人々には当時の三島総長を始めとしての苦心は永久に判らないのだ。

先ずGHQ關係者は日本のボーイスカウトは米國その儘なら許可してもよいと云う処まで占領關係国の内諾を得たのであった。「ちかい」「おきて」其他全部翻訳する事となり、我々の苦闘は日夜続いたのであった。後になるとあれが悪い……これがかん……と批判は端的に下せるが、我々の翻訳したものを、三島総長、中野忠八先生等とGHQ關係者と會議を重ねその間日

本の国情も理解させ一步一步築きあげたのであるから今から考えても並々ならぬものであり、よくもあれだけの情熱を傾注出来たと思ふ程である。

当初の許可条件は、

(一) ユニフォームを使用しない。(二) スカウトサインのみで敬礼をしない。(三) 号令をかけない。行進をしない。等であった。之ではスカウティングが出来ないが兎に角第一許可をとって、彼等に何んなものか見せようと云うことになった。

岡本礼一氏が『野球をやるにもユニフォームを着るではないか。スカウトサインのみでは駄目だ。』と強調するので、マ元帥の最高副官であるハフ大差に詳細に説明してマ元帥に直接持ちこんでもらった。

ユニフォームの許可をとると原綿の放出を要望した。之も成功して初期のボーイスカウトのユニフォームとなったのであった。ボーイスカウトが制服で整列した姿を見た三島総長は、

『日本のボーイスカウトも之で立派になりました。』と感慨深くスカウトの顔を見ておられた。

三島総長と歩んだ二十年……思出は限りなくある。

フリーメーソン

ペルリ提督が幕末日本に來た折に浦賀で、何か特別の会合をしているらしかった。当時日本側の接待係の武士が、何事か中に入ろうとしたらば許可されなかったと云う。その会合はフリーメーソンの人々の集りで、会員外は入る事が許されない……フリーメーソンは友愛結社である……と説明されても、当時日本には此の団体を知るに必要な資料も又は之に相当する団体もなかった。

フリーメーソンは秘密団体と云う事となり、日本人は加入されないと云う紳士協約が成立していたらしい。

マクアーサー元帥は日本の民主化に伴い、日本人を平等に取扱う為に、このフリーメーソンの門戸を日本にも開放しようとの意志をもっていた。元帥はこの意志を三島総長に伝えた。

『私は伯父さんである牧野伸顕伯の秘書で欧州に行きました。処が戦前フリーメーソンの会員であるとの嫌疑をうけて取調

べられた事があります』……と語ったとの事である。元帥は、

『あなたは立派なメーソンです』

と云われたと云う。三島総長は、

『元帥から協力を求められました。之は大変な事であるから君が努力して下さい。』

と云う事で、米軍側のリヴィスト、フィシャー、スチュワート、ネピア諸氏と直接連絡し、マ元帥最高副官ハフ大佐と連携を保つ様になった。

三島総長は佐藤尚武、星島二郎、小松隆、李王殿下、野田俊作、上原悦次郎、加納久郎諸氏にフリーメーソンの性格を説いた。そして多くの人々が会員となった。米人メーソンが水交社を彼等の集会場とする為に購入したいとの事で、政府当局と一九四七年以来折衝をしたのは私であったが、最初に橋渡をしたのは三島総長であった。日本人の入会申込は一九四八年末には実現したが、日本に受け付けられ、一九五〇年一月佐藤、三島、芝均平等諸氏と私も入会した。水交社購入は勿論一九四八年末には実現したが、日本政府の条件としては水交社をボーイスカウトの如き団体に施設を提供する事とあった。その為に水交社の一階には三島総長室、日本連盟、東京連盟、需品部等を与えられた。其後メーソンは室内の改造をする事となり、私は彼等の協力を得て百万円の募金に成功して西久保巴町に日本連盟本部を購入したのであった。諸官庁に近く若し此の場所にスカウトホールを改築したら何んなにか良かったと思うが、後になって惜しんでも仕方がない事であった。

兎に角米人メーソンは此の水交社入手と共にボーイスカウト運動に全面的に援助してくれた。

換言すれば日本のスカウト運動は米人メーソンの援助によって再建されたと云っても過言でない。世界のスカウト運動が如何にメーソンによつて強く支持されているか、その後知ったのである。

マクアーサー元帥は三島総長等日本人が多くメーソンになったのを悦び最高の祝辞を送っていた。

フリーメーソンの根本精神を理解させる為に三島総長の払った努力と犠牲は大きかった。フリーメーソンに対する日本の根本的理解は皆無であったが、米国ではワシントン以下歴代大統領を初め多くのリーダーが此の友愛結社の会員である事や英国では国王以下多数の人々が此の結社精神でつながれている事を強調して説明することを忘れなかった。

実際問題としてフリーメーソンに我々が入会し、水交社購入を実現した為にマクアーサー元帥が、『日本の再建の為にボーイ

スカウトの民主的精神により次代のリーガーの訓育を望む』と述べ、三島総長の手を握って日本に於ける最初の青少年団体として許可したのであった。

三島総長をボーイスカウトのシンボルとして再建する為には、何うしても追放免除をせねばならなかった。イタリーに行つた事等は当然追放の対照となつていた。米國二世で米國共產黨員であり、占領直後日本に来て放送を握り、追放関係に有力であつた塚原某は三島総長と賀川豊彦氏を追放すべく努力したと聞いた。

幸にして追放関係の責任者ネピア少佐はメーンソンであり、リビスト少佐、スチュワード中佐等は有力なるメーンソンで我々の意のある処をマクアーサー元帥に伝えてくれた。

三島追放せず……の確約を得た私はボーイスカウトとメーンソンの運動に全力を尽した訳で、三島総長は私の此の努力に対して非常に感謝してくれたが、占領軍当局がボーイスカウト運動に大きな期待をもつていたからであり、私個人が如何ともする事の出来る問題でなかつた。

勿論戦前から日本に居住してYMCAの名譽主事であつたダーギン氏が最高顧問の一人として活躍してくれたからである。ダーギン氏の事は衆知の事であり、度々書かれてゐるから、過去に於て何人も知らないフリーメーンソン関係を特に書いておきたい。其後健康を害され、フリーメーンソン関係は全く私に一任された形になつたが、私自身一九六〇年の米國ボーイスカウト・ジュビリジャンボリーから帰り殆ど再起不能を伝えられた程の病氣をして、フリーメーンソン関係からは疎遠になつてしまつた。日本のフリーメーンソンに於て三島通陽の名は決して忘れる事は出来ない。私は林董伯に續いて日本の偉大なメーンソンとして記録しておきたい。

決死の日の丸行進マニラ市ルネタ公園の感激

戦後の日比関係は最悪であつたと云つてよい。前比島駐日大使ホルゲ・ヴァルガス氏とは戦前から親しくしていた。戦後ボーイスカウトの総長となり、青少年の育成に努力していた。

一九五四年夏比島ボーイスカウトの第一回ジャンボリーに際し、ヴァルガス氏は東京に来て日比関係を好転させる為に何う

しても日本のボーイスカウト派遣団を派遣する様に要請した。マニラ・タイムズ紙運動部長のホーキンス君は多くの日本人新聞人や戦犯関係者を助け、日本にライオンズクラブ創始に努力したが、彼も東京に来て日比閨係を何うしても好くさせなくてはならないと強調した。三島総長は何うしても私に行く様にすめられた。私は比島に親友の多い事と総長と二人三脚で日比親善に努力しようと考えておられた。彼は各方面に手紙を書いて私の旅費作りを援助して下さった。総長は団長となり、私は副団長となって飛行機でマニラに飛んだ。派遣団の隊長は岡山の金光整雄君で全国から優秀なスカウトを選抜して一足先に船でマニラに着いていた。

ホーキンス君はマグサイサイ大統領と折衝して日本派遣団をマニラ市内の小学校に起居させ、校長自ら日本ボーイスカウトと寝食を共にして、危険から守ってくれていた。マニラ市内の対日感情は極めて悪く、ボーイスカウトが町に出る時は必ず比島ボーイスカウトが何名か両側について『護衛』の形をとった。新聞は極めて好意的に報道してくれたが、市民の眼は冷酷に日本の少年達を追っていた。

比島ボーイスカウト本部は私にロータリークラブ、YMCA、教育団体等で朝食から講演をするスケジュールを組んであり、毎日数回比島人を前にしての戦後の日本の歩み、民主日本の姿から、高山右近時代のマニラの日本村、タバオの開拓等々を語った。日を追うにつれて反響を聞く様になった。中には密かに『祖父は日本人であった』とか親密感を示す者も出て来た。三島総長は之等の報告を悦び、時としては自ら立って比島の人々に訴えた。私は誠心誠意通訳をした。『ほんとうに有難う……』と両手で私の手を握って涙を浮かべていた……

マグサイサイ大統領に会い堤康次郎氏(当時衆議院議長)から贈られた国宝級の絵画と時絵を手渡した。

『日本からボーイスカウトの来てくれた事は、日比閨係を好転させるには最高のものです。諸君は立派な親善使節です。マニラの町は必ずや親日になります……』と大統領は云った。

三島総長は『私共はボーイスカウトの精神で世界友愛精神を実現出来るものと信じて来ました。世界中何所に出しても優劣のない隊長以下スカウトを連れて来ました。尚、私と村山君はメーソンであります。比島のフリーメーソンの人々が幾回ともなく日本に来て、憎悪と呪詛をのりこえて兄弟愛の手を伸べてくれました。そして私達は日本で最初のメーソンのグループとなりました。村山君はグラント・ロッジに巨大な石燈籠を贈って、日本人の感謝の意を示しています。マニラに着いてからメ

ーソン兄弟から示された友愛精神に感謝しています……』と熱のこもったスピーチをした。グラランド・ロッジでも、マグサイサイ大統領に会った事から日比両国関係に説き及んだ。

ゴルデンバークと云う仏国人で戦後比島に帰化したメーソン宅に招待されて、私は三島総長と数日同じ部屋で過した。彼の邸宅はマクアーサー元帥の父が比島総督の折に住んでいた家で中々豪勢で、ジャンボリーのキャンプで過した我々には誠に有難い限りであった。

ケソン初代大統領が戦前独立運動をしていた頃、私は桑港で会っていた為に、彼に関する話も講演の時は中々よく聞いてもらった。

三島総長と私は度々同じ部屋で寝る事が多かったが、私のいびきに悩まされていた。『あなたのいびきに悩まされて眠れなかった……』と云われても、同じ部屋になってお互いに顔見合わせて笑うのであった。人間味と人情味……何かと思出の多い事のみである。

一九五四年四月二十四日……忘れられない日であるばかりでなく日比歴史上不滅の日でなくてはならない。敗戦以来十年振り、マニラ市に日章旗を高く輝かせ日本のボーイスカウトが行進した日であった。

ジャンボリーはケソン市郊外で行われた。新興国の意気に燃えたつ大会であった。毎日焦げつく様な暑さであったが、四月二十四日はマニラ市に出て大行進する為に、キャンプ地から出発した。

比島官憲とボーイスカウト役員は、対日感情が非常に悪いから、大行進には各国派遣団は国旗を携行せず行進してほしいと云う事になった。米国は第一に賛成した。

然し、対日感情が悪ければ好転させる為に努力するのがボーイスカウトの使命であり、日本も大会に参加している事を市民に示すべき事を強調した。私は国旗のない行進は無意味であるから中止すべき事を主張し、比島官憲も折れたので先頭を行進部隊はバンドの音で勇ましく出発していた。

幸にして共同通信特派員が来ていた為に、その自動車で国旗をとりに行った。旗手が国旗を高くあげた時は予定より稍おくれたが、私が先頭に立ち大国旗を従え、金光隊長そして派遣団員を一行横隊にした。

機関銃をつけたジープが左右につき、ピストルを腰にした私服警官十名が、ラクソン市長の特別配慮で警戒にあたった。

金光隊長以下緊張して蒼白な顔である……

『本日の行進は歴史的な行事である。何が起るか解らない。誰が遺骨となるか判らないが、諸君は堂々と行進してほしい。日本の名譽にかけ立派にやろう……』行進開始……

幾万かのマニラ市民は静かに憎しみの眼を向けていた。時々日本語で『バカヤロー！』とか、悪口が聞えて来た。警備の人々が直ちに制止すると云う緊張というか息づまる光景であった。

マニラ市の中央にあるルネタ公園の大スタンドは数十万の人で埋っていた。マグサイサイ大統領の巨軀の近くにヴァルガス氏と並んで三島総長が立っていた。

『頭！右っ！』と号令すると日本の派遣団はいっせいに敬礼をして堂々と進んだ。万雷の如き拍手がわいて来た。この瞬間に我々マニラ市民の心を握ったのだ——日比親善の使命を果たしたのだ……一寸後を見ると日の丸は崇高に輝いていた。

行進が終わると暫くして三島総長は馳せつけて、

『諸君！おめでどう。よかった。よかった……マグサイサイ大統領が日本のボーイスカウトが来た——大拍手を送ろう……と云うと期せずして大拍手になった。之で今日迄ボーイスカウトを比島まで連れて来た意義があった。』そして私の手を握って涙を流していた。

この日を境にマニラ市の対日感情は一変したと云ってもよかった。大野勝巳大使もボーイスカウトの果たした使命を大きく評価していた。

市内を歩くも以前とはちがった空気であった。

『トモグチ』と云って握手を求めて来る有様で、三島総長がこの時程感激し、悦ばれた事は先ずなかったであろう。決死の大行進は永遠に記録しよう。

ガールスカウト

時移り、人変わり、過去の事は何事も忘れられてしまう事が多い。ガールスカウトもその一つではなからうか。

三島総長はマ元帥にボーイスカウトの再建要望した折に、ガールスカウトもBPの精神に基いて許可をされたいと申請している。

ダーギン氏と私はGHQに提供する資料をまとめた。三島夫人が会長となり発足した事は当時の記録にある通りだ。

藤村千良夫人の協力なくしてはガールスカウトの事は何事も運ばなかったと思う。三島、藤村両夫人のコンビは中々よくHQの了解も得られた。ガールスカウトに関する限りGHQの許可を得たから、私の出る幕でないから全面的に手を引いていた。

BPがスカウターとガイドに与えた最後のメッセージの中で、

スカウティングもガイディングも指導者は眼を聞き健康にして、有能な市民(男女両性)を訓育すべきであり、狭量な自己主義や政治的、派閥的行動派排除して人類福祉の為に広い気持ちで此の運動をすすめるべきである。

と云っているが中々味わうべき言葉だ。

三島総長は如何にガールスカウトの再建にも努力されたか知る人ぞ知るである。

三島総長と記念切手

三島総長は極めて綿密な観察を行いBPの精神を何事にも生かす殊に努力したのが生涯の信条であったと云ってよい。私の切手収集歴はやがて五十年になるうとしている。スカウト切手の収集と世界各国のスカウト運動の研究とを平行して行うとよいと云うのが主張で、総長は此の点を非常に高く評価してくれている。

『世界のスカウト切手』を出版する様に多年すすめてくれていた。切手趣味社の吉田利一君の協力を得て出版準備を急いでいたが、もう僅かでお目にかける事が出来たのに惜しい事であった。

世界ジャンボリーや極東会議其他採先から必ずスカウト記念切手を送って下さったが、カバーの作成と記念スタンプの使用等を詳細に説明したが過去一度として忘れずに私のコレクションに協力して頂いたが感謝して余りあるものだ。外国から『日本のチーフスカウト』と特に送られて来たカバー等は『自分の手もとにおくよりも貴君のコレクションに入れておいた方が将来役にたつ』と云うので何時も受取るや速達で送って来たが、之は切手収集家は一日でも早く入手することに大きな喜びを

感ずる事を知っておられたからであつた。

『世界のスカウト切手』の出版を前にしてコレクションの頁をくりつつ万感迫るのである。

一九五四年の比島ジャンボリーの折にはマニラ市で世界切手展があり、総長と二人で二日連続で見に行き、大いに切手知識を吸収したが懐かしい思出である。

日本大学講習会

日本のボーイスカウト運動に於て指導者の養成が急務であるとして、その目的を果す為には三島総長、内田二郎氏等と先ずスカウト・クラブを始めた。其後占領軍関係のステイグ氏とマ元帥の最高顧問のターギン氏等が特にこの点を強調した。

米国の大学ではボーイスカウト科目にクレディットをやっているが、日本も将来そうすべきだとの意見であつた。日本大学の呉文炳総長に持ちこんだ処理解して頂き昭和二十五年四月十二日には極めて意義ある開講式を行うまでになった。昭和二十七年十月までに四百二十六名のリーダーを送出した。此の講習会も中絶していたが、古田会頭と永田総長の御好意により昭和三十九年十二月九日——実に十二年振りで再開された。

三島総長は此の再開を非常に悦ばれた。殊に三島夫人の祖父松岡康毅氏は日本大学初代総長であつたとの事で之も何かの因縁であろうとメッセージをよせられたが、之が最後のものとなつた。即ち、

十二年振りで日大で指導者講習会が開かれると云うことは我々スカウティングに携わる者として大きな喜びであります。日本の最高学府でこのBS講習会が開かれると云うことは大きな光明があると思ひます。釈尊のたてられた仏教は其後インドや、支那や、そして日本に渡つて多くの求道者や、学者がこの教えを又深く高く切り開かれました。キリスト教も亦然りであります。偉大なるBPが打立てられたスカウティングも亦学問の力によつて、より高く、より深く切り開けられるべき事と思ひます。これには学者の方々の協力も大いに必要と思ひます。

この最高学府の学問の雰囲気の中でそして永田先生方の御協力を得る事はこの道に進む我々にとって誠に有りがたい事と申すべきであります。佐野常羽先生が実践窮行、精究教理、道心堅固と云われた言葉が又思出されます。この精究教理が最

高学府の雰囲気の中で行われる事に一つの意味があると思います。その場を与えて下さった永田総長に深き感謝を捧げるものであります。

スカウト・マーク

ボーイスカウト再建に際しGHQと折衝しつつ幾多の問題があった。ボーイスカウトの記章制定に際し、戦前三種の神器を組合わせたものは好ましくないとして自発的に引きこめた。

米国の記章を使用するとしても真中の鷲に代るに何にするか平和のシンボルの鳩がいいと云う意見が強かった。私は三種の神器である八咫鏡を主張して譲らなかつた。新渡部博士の「武士道」の中に、

靈魂を神の宮たる人心の至聖殿に祭り、これよりして神託を聞くものなりとす。誠に神祠に賽せんか、礼殿の裏、礼拝の物体、祭具の多きこと見ずして靈廟唯だ質素なる一面の銅鏡をかくるあり、この鏡面をかくるの理は、以て人心に象り、此心若し曇らざれば神明の靈姿を映ずべしとの義なり。故に人若し神社に詣ずれば我貌の神鏡に映ずべしとの義なり。……

とある言葉その他、天照大神のお言葉を引用して如何に神話と共に鏡は大切であり、平和の意義のあるかを論じた。中野忠八先生は何人にも先んじて私の弁論を支持された。続いてゲーギン氏が、

村山さんの云う事は正しいと思います。神話や伝説を尊重すべきでしょう。と云ってくれた。之で総てが解決し全員一致でスカウトマークの中央に八咫鏡を使う事になった。私はスカウトマークを見る度に當時を思い三島総長の言葉を出す……

之で日本精神がボーイスカウトに真直ぐに入りました。感謝します。日本のスカウト運動の続く限り今日のあなたの議論は忘れられないでしょう。之でよかつた……

比島第一回ジャンボリーの折もヴァルガス氏の邸宅に行き、當時を想起してスカウトマークの話をしておられた。思出多い事である。

中央義士会

三島総長は泉岳寺の中央義士会の顧問で赤穂浪士の研究には中々造詣が深かった。B Pが乃木大将に会い武士道精神に感奮し、英国の騎士道とを並べて世界の二大道義精神とした事は周知の通りである。B Pが一九一二年世界一周の途次横浜につくと品川の泉岳寺に足を運び浅野公と四十七士の墓前に詣でた。泉岳寺にて墓前にぬかづく日本人の姿に接した。

何故切腹したか——B Pは武士道を深く研究して何か嚴肅なものを感じた。

B Pが英国に帰って明治大帝の崩御を聞き、続いて乃木將軍の殉死の方法は日本の武人が幾世紀もの間生きぬいて来た武士道の切腹によるものであった事を知って、乃木將軍に対する尊敬の念は一層高まった様であった。

B Pの赤穂浪士の研究は、外人殊にスカウト運動創始者としてのB Pの觀察したものととして中々貴重である事を、私は折にふれて三島総長と論じそして幾多の点で意見の一致点を見出した。

中央義士会で私の研究を発表するように提案され五月十四日愈々私見を発表する事となっていた。三島総長は殊の外悦ばれていたが、ついに私の『B Pと義士論』を聞く事なくして他界された事は残念である。

一九五四年にマニラで再々講演をした折に、多数の比島人が対日悪感情をかえた事があり、同席の三島総長は『あなたの話は中々よいからやりなさい』と云う事で、ロータリー・クラブや其他の団体で講演する機会を与えられたが、今考えても恐縮の限りであった。総長を前にしてB Pやスカウティングを論ずる事すら僭越至極であったかも知れない。

『一人でも多くの人がスカウティングを説き、新聞や雑誌に一人でも多く意見を發表する事が好ましい』と云うのが総長の持論であった。

総長の演説

三島総長は演説がうまかった。貴族院が解消され、参議院の全国区で立候補された時、ボーイスカウトの同志に先ず『スカ

ウト健在なり』と知らせようとの意気に燃えていた。

選挙運動に飛んで歩いた同志は純真な気持で、文字通り日夜奉仕した。手弁当、腰弁当とはこの時のことで『三島参議員』が実現する事によって我々はボーイスカウトの基礎が固まるものと信じていた。この選挙運動中、三島候補の演説は聞かせた。人々をして感動させた。勿論、平時の演説も中々要を得て適切な言葉を使用されていた。

米国ボーイスカウト総局長ウエス博士の追悼会が靈南坂教会で行われた時のスピーチ等殊の外印象に残っている。総長の演説の通訳は非常に神経を使った。第一に日本の総長の威厳と、使用される感動的修辞は、通訳をするには困難な事が多く実にスピーチに対して綿密な準備をされた。

会議に於て外人のスピーチに対する答弁に於て彼等が理解出来る様な例によって、日本を知らせる事に努力された。私は占領中の会議に於ては、先方のスピーチの原稿を先に貰い内容を検討して三島総長とスピーチの大体の方針を決めた。私は占

最初は総長の権威あるスピーチのフィリングが中々出なかつたが、気持ちちがビツタリするのは三、四年の月日を要した。

BP一家との関係

BP一家との関係は特に記しておく必要がある。BPの長男ピーター氏が英国議員団で来日した折に彼は三島総長を訪問して、

父から日本人は如何に立派な人々であるか知らされていたが、日本に来て嬉しいです。父は乃木將軍の事は特に尊敬していました。

と手をとって語っていたば、之は絵にしておきたい光景であった。私は一九五八年に英国に行きBP家を訪問した。ピーター氏は三島総長の写真を飾っており『私の最も尊敬する一人である』と語っていたが心の温る思いで帰国早々報告した事がある。英国のジュビリー・ジャンボリーには三島総長が出かけて行く事を祈願していたが健康が許さなかつたのである。

レディBPとは殊更に親しかった。戦後日本のボーイスカウトの国際復帰及び天皇陛下に対するシルバールフ（銀狼章）の再発給等に際し、レディBPに密接なる連絡をして実現に運んだのであった。

日本少年団の解散後も国際登録費を自費で支払い、誠意ある総長の人柄が常に人々を動かしたのであったと思う。

三島総長がBP一家と親密であった事は日本のスカウト運動にも非常にプラスであったが、ピーター氏は癌で五十才の若さで長逝し、今三島総長を喪うに至り淋しきを感じるのである。

森村学園其他

ボーイスカウト運動を再建しGHQの許可をとる為にボーイスカウトクラブの集りを森村学園で行い、三島総長は歌の指導から班制度、内田二郎氏はスカウティング、毎週の会合は未来の夢で燃えていた。

『遠き山に……鐘がなる……ボーン……ボーンボーンは鐘の感じを出して歌って下さい。』
と未だに三島総長の声が耳に残っている。

追放を恐れて出て来ない人々、その他を引き出して来てスカウト運動の基礎をつくった事は思出が多い。その当時から残っている人々も少なくなってきた。

我々の最大の誇りは占領下でも日の丸の国旗を高くかかげていた事だ。昭和二十二年少数のボーイスカウトを集め……それは極めて形式的のボーイスカウトであった……日の丸の国旗をたてて会合をした処、翌日日比憲兵司令部に呼出された。

栗鴨に投獄されるのかと思つて行くと、

ボーイスカウトは中々よいから大いにやってみよう。国旗を掲げる事を正式に許可したと云う事は出来ないが、ボーイスカウトが使う事は大いに宜しい。ボーイスカウトが盛んにならなくてはならない……

と激励された。その翌年は銀座街頭を行進してしまった。極めて少数であったが、町の人々は涙を流して迎えてくれた。

之について三島総長は『占領下に一日も国旗を下げず、国旗の尊厳を人々に知らして来た事は、なんと偉大な事でしょう。感激です。感謝します。』と悦んでくれていた。小山前理事長も『日本歴史に輝かしい一頁をのこす事が出来た』と云ってくれていた。

三島総長の長逝で思出す事は限らない。記録に残さなくてはならない事も多い。無限である。

